

さくらそう通信

サクラソウの自生地を尋ねて

サクラソウトラスト地を望む
(2000.5.4撮影)サクラソウトラスト地から周辺を望む
(2000.5.4撮影)

樋ノ詰のサクラソウ自生地

聞き慣れない呼び名かも知れませんが、樋ノ詰は桶川市郊外の荒川沿いにある地名です。かつて荒川流域には沢山のサクラソウ自生地があって、それぞれ尾久の原・浮間原・戸田ッ原・田島ッ原というように、その土地

の名前をつけて呼んでいました。最近では、樋ノ詰のサクラソウ自生地と呼ばないで、荒沢沼のサクラソウ自生地、あるいは江川のサクラソウ自生地と呼ぶようです。ここには桶川市と上尾市の境界が通っているため、一方の市

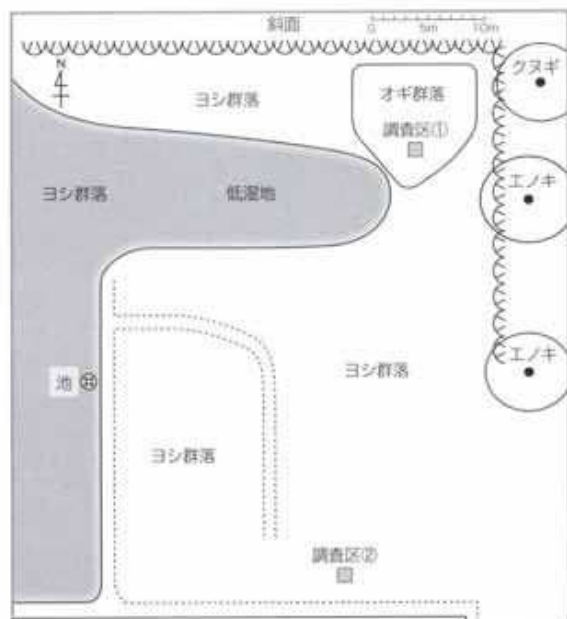
の地名で呼ぶより、ここが昭和初期まで荒沢沼と呼ばれる沼沢地だったことや、両市の境界付近を流れている江川用排水路などによる呼び名が、ふさわしいとされたのでしょう。

さて、上で述べた江川用排水路は荒川下流域の左岸で荒川と合流しますが、そのあたりの堤外に広がっている低湿地が樋ノ詰のサクラソウ自生地です。この低湿地は第二次世界大戦後の食糧が不足した時代に、ほとんどが開墾されて田畑に変えられてしまいましたが、それまでは一面にオギの生い茂る原っぱで、春にサクラソウが群生する所でした。幸いにもサクラソウの群生している場所の一部が現在も残っていて、その場所は「サクラソウトラスト」を設立した人々によって守られています。荒川流域に沢山あったサクラソウ自生地も、現在まで残っているのは樋ノ詰と田島ヶ原の2箇所だけになりました。貴重な自然遺産でもあるので、ぜひ守り続けられることを願って止みません。

では、ここのサクラソウ自生地のようすを観察してみましょう。現在ではサクラソウ群落の残っている場所は、江川用排水路の右岸にある「サクラソウトラスト地」の中にあります。この場所は東西に約30mと南北に約60mのはぼ四角形の範囲で、その東側と北側は小高くなっていてクヌギやエノキが疎林状に生え、南側と西側は休耕田になっています。江川用排水路から約30m離れていて、標高は8.1mから8.7mの間ですが、休耕田の水面との差はあまりなく、低湿地になっています。

サクラソウの訪花昆虫やサクラソウ群落の構造を調べるために、樋ノ詰のサクラソウ自生地を訪れたのは2000年5月4日のことでした。この日、ここのサクラソウは満開で、同じ日に田島ヶ原サクラソウ自生地では満開をやや過ぎていました。ここが満開になるのは田島ヶ原より5日間前後は遅いようです。樋ノ詰は田島ヶ原から北西に17kmほど離れているために、サクラソウは冷たい北西の風に晒されて生育が抑えられ、満開の時期が遅くなるのでしょう。

サクラソウの訪花昆虫については、午前10時から午後3時30分まで調査しました。この日は快晴で暖かく、気温は午後1時には24℃にもなりました。「サクラソウトラスト地」の中では、ノニガナ・イワニガナ・オオジシバリ・コオニタビラコ・オニタビラコ・ハルジョオン・ヒメジョオン・ムラサキサギゴケ・タチイヌフグリ・キュウリグサ・ヤエムグラ・チョウジソウ・マユミ・ゴマキ・サクラソウ・ツボスミレ・アギスミレ・アリアケスミレ・ヘビイチゴ・オヘビイチゴ・ミツバツチグリ・イヌガラシ・ジロポウエンゴサク・クサノオウ・コハコベ・ウシハコベ・オランダミミナグサ・ノミノフスマ・カラスノエンドウ・ノウルシ・アマドコロ・カラスビシャク・ウラシマソウ・イチゴツナギ・カニツリクサ・チガヤ・アオスゲ・カサス



サクラソウトラスト地内にみられるサクラソウ自生地

ゲなどの花が咲き揃い、多くの昆虫が活発に活動していました。

この日は、これまでの調査でサクラソウの花にやってくることの多かったチョウ類に目標を絞って観察しました。観察しているときに目の前を飛び回ったのは、アゲハ(数頭)・キアゲハ(数頭)・モンシロチョウ(多数)・モンキチョウ(雌1頭)・キチョウ(雌1頭)・ツマキチョウ(多数)・カタテハ(1頭)・ヒメウラナミジャノメ(1頭)・ヤマトシジミ(4頭)・ルリシジミ(1頭)・ベニシジミ(数頭)・イチモンジセセリ(3頭)・ギンイチモンジセセリ(3頭)でしたが、この中でツマキチョウ(5頭)・カタテハ(1頭)・イチモンジセセリ(1頭)が、サクラソウの花に止まって蜜を吸っているのを観察することができました。

これまでの数年間、サクラソウの花の蜜を求めて集まる昆虫を尋ねて、数箇所サクラソウ自生地を見て回りました。訪れた先々で、お花畑のように咲き誇っているサクラソウの群落を見ることができましたが、サクラソウの蜜を求めて群がって集まる昆虫には出会えませんでした。近くにいろいろな昆虫が見られたので、それらの場所が特に劣悪な環境であったとは思えないのです。ここのサクラソウ自生地の場合も、自然環境は悪くないし、多くの昆虫にも出会えましたが、サクラソウの蜜を求めてきたのは7頭のチョウだけのようでした。サクラソウの花は昆虫が花粉を運ぶ構造になっているといいますが、それなのに昆虫が群がって集まらないのはなぜでしょう。ここのサクラソウ自生地の観察でも、その謎解きはできませんでした。

サクラソウ群落の構造を知るための調査では、群落をつくっている植物の特徴を観察することにしました。今回はサクラソウ群落を真上から見下ろして、縦横1mの四角い面積の中に生育している全ての植物について、種類

ごとに繁茂している割合(被度)と高さを測って表にまとめ、表から特徴を見付ける方法を用いました(4頁表)。

春には同じように見えるサクラソウ群落も、夏や秋に群落を覆うオギとヨシに注目すると、調査区①はヨシが13%で、調査区②はヨシが3%とオギが44% ですから、夏や秋には①のサクラソウ群落はヨシ群落に、②のサクラソウ群落はヨシの混ざったオギ群落に変化するはずで。そこで、「サクラソウトラスト地」の中にあるサクラソウ自生地を示した図に、この調査を行ったサクラソウ群落の位置と、その群落と同じ構造の広がっている範囲を記してみました。すると、ヨシの混ざったオギ群落の範囲は地表の少し高い北側にまとまっていて、その他はヨシ群落の範囲になっていることが分りました。一般に陸地では水の多い土壌にはヨシ群落が、それより水の少ない土壌にはオギ群落が、さらに水の少ない土壌にはススキ群落が発達します。ここのサクラソウ自生地にはヨシやオギの群落が発達しているの、水に恵まれているといえそうです。

多くの場合、ヨシ群落やオギ群落の発達する場所の土壌にはサクラソウの生育に適した水の量が保たれています。同じ草原にみえても、マコモやガマの群落が発達している草原では、土壌の水が多過ぎてサクラソウは生育できないし、ススキの群落が発達している草原では、土壌の水が不足するのでサクラソウは生育できません。



夏にはオギ群落となる場所のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)



夏にはヨシ群落となる場所のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)



開花最盛期のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)



保護増殖中のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)

いま、田島ヶ原サクラソウ自生地では土地が乾いて困っています。どうやら、すぐ隣りに造った公園の排水をよくしたことが原因のようです。そのために、ヨシ群落が見られなくなったばかりか、次第にススキ群落が広がってきました。この状態が進めばサクラソウは生育することが困難になるでしょう。このような田島ヶ原サクラソウ自生地の現状と比べると、「サクラソウトラスト地」の中にあるサクラソウ自生地は、ヨシやオギの群落が発達していてサクラソウの生育にとって理想的な状態にあるといえます。そして、田島ヶ原サクラソウ自生地では土地が乾燥したために消滅したり希少になった、アリアケスミレ・シロボウエンゴサク・ミツバツチグリ・ハンゲショウ・コオニタピラコ・ツルニンジン・コオニユリ・ノハナショウブなどの湿生植物といわれる仲間が、ここのサクラソウ自生地の中で元気に生育しているのを観察することができました。このような湿生植物が安定した生育を続けられるのは、自然環境に恵まれている証拠でもあります。今回の観察で、このサクラソウ自生地は土壌の水の量が保たれているという、優れた環境条件によって育まれていることが確かめられました。記録が残っていないので、はっきりとは言えませんが、かつての田島ヶ原サクラソウ自生地に土壌の水の量が保たれていた時代の姿を、「サクラソウトラスト地」の中にあるサクラソウ自生地で見たい思いがしました。

(さいたま市文化財調査専門員 磯田洋二)

表 サクラソウ群落と出現する植物の状況

種ノ誌 (2000.5.4調査)

調査区①

出現植物	被度 (%)	高さ (cm)	
サクラソウ	31	22	開花期
カサスゲ	19	43	開花期
チョウジソウ	17	46	開花期
ヨシ	13	100	
カモジグサ	13	38	
ヘビイチゴ	12	8	開花期
ナガボノシロフレモコウ	9	36	
オランダミミナグサ	6	29	開花期
アキノノゲシ	3	23	
スイバ	2	71	開花期
ツボスミレ	2	16	開花期
ハナムグラ	1	28	
ノニガナ	1	26	開花期
ミゾイチゴツナギ	1	25	開花期
ヤブジラミ	1	23	
タチイヌフグリ	1	20	開花期
イシミカワ	1	14	
タネツケバナ	+	14	開花期

調査区②

出現植物	被度 (%)	高さ (cm)	
オギ	44	76	
ツボスミレ	28	19	開花期
サクラソウ	22	16	開花期
ヤエムグラ	4	19	
ヨシ	3	88	
ツルウメモドキ	4	25	
ヘビイチゴ	2	4	開花期
ハルジョオン	1	30	
ウシハコベ	1	24	
イシミカワ	1	22	
カナムグラ	1	15	
シロネ	1	12	
ヒメジョオン	1	6	
コハコベ	1	10	
ジロポウエンゴサク	1	10	開花期
コオニタバコ	1	10	
ヒナタイノコスヂ	1	9	
ツユクサ	+	5	

備考：調査面積は1㎡の区画です。被度は出現した植物が調査した区画の中に占める割合を%で示したものです。「+」はその割合が1%未満の場合です。

文献から見たサクラソウの花見の実態と自生地絶滅の一要因

毎年4月、心地よい春風の中、さいたま市のさくら草公園では「さくら草まつり」が行われ、公園に隣接する田島ヶ原のサクラソウ自生地には、擬木とロープで整然と区画された指定地の中、可憐なサクラソウの花を楽しむ多くの市民の姿がある。

さて、このような整然と区画された場所でのサクラソウの花見は、決してはるか昔から行われていたわけではない。むしろ、それが始まったのはつい最近のことである。では、昔のサクラソウの花見とは一体どのようなものだったのであろうか。文献を追って検討したい。

よく知られた資料であるが、古くは江戸時代後期の『江戸名所花暦』に尾久の原のサクラソウの花見の様子が挿図として描かれている。荒川の川辺で、花魁らしき人物が扇や供のもの数人を引き連れ、地面に毛氈を敷き、持参した弁当や酒を広げ、傍らでは、3人の女性が得意げにサクラソウを摘んでいるという構図である(6頁カラー写真)。そして、サクラソウの花見の土産として、荒川の白魚をすくい取って、サクラソウに添えて持

ち帰ることが行われていたことを同書は続けて記している。かつては、荒川沿いに尾久ヶ原、野新田、浮間、戸田ヶ原などの多くのサクラソウ自生地があり、どこの自生地でもこのような光景が繰り広げられたことであろう。

下って明治から大正時代、この時代も同様なサクラソウの花見が行われていたことが、夏目漱石『虞美人草』や田山花袋『東京近郊 一日の行楽』などで明らかである。その一文を引用してみよう。



「もう花見は散ってしまったじゃありませんか。今時分御花見だなんて」

「いえ、上野や向島は駄目だが荒川は今が盛だよ。荒川から萱野へ行って桜草を取って王子へ廻って汽車で帰ってくる」

「いつ」と糸子は縫う手をやめて、針を頭へ刺す。
(『虞美人草』)

「浮間ヶ原は桜草の名所だ。(略) 川を渡ると、浮間

ケ原である。一面、桜草で、丁度毛氈でも敷いたようである。頗る見事である。で、日曜、土曜などには、東京から女学生達が沢山にやって来る。女学校で、運動会に生徒をつれて来たりするので、桜草は採られ、束にされ、弄ばされて、娘達の美しい無邪気な心を飾る。」

〔東京近郊 一日の行楽〕

という具合である。実際、当時撮影された写真を見ても、自生地の中にも掛け茶屋を設け、遊覧者は自生地の中で花見をしている（写真①及び「北区史」掲載写真「桜草の名所浮間ヶ原」「桜草開花期の遊覧者と掛け茶屋」）。これがかつてのサクラソウの花見の実態であり、それは花摘み以外の何者でもなかったことがわかる。サクラは愛でる対象であったが、サクラソウは決して見るものではなく、摘んで持ち帰るものだったのである。

このような光景はなにも限られた場所のことではなく、どこの自生地でも一般的に見られる光景だったことは、佐藤良徳氏が野新田桜草の会のホームページで作成した「桜草絶滅の原因」というコンテンツで引用している数多くの文献を見れば明らかである。4点ばかり引用してみる。

「東京名所の一つに数えられている浮間ヶ原の桜草保護については、(略) 今年はずから掘り出すのを禁じた。しかし摘むのは禁じていないから、心なき遊覧者がむしるはむしるは。先を争って両手に束を造る」
〔東京朝日新聞 大正7年4月16日〕

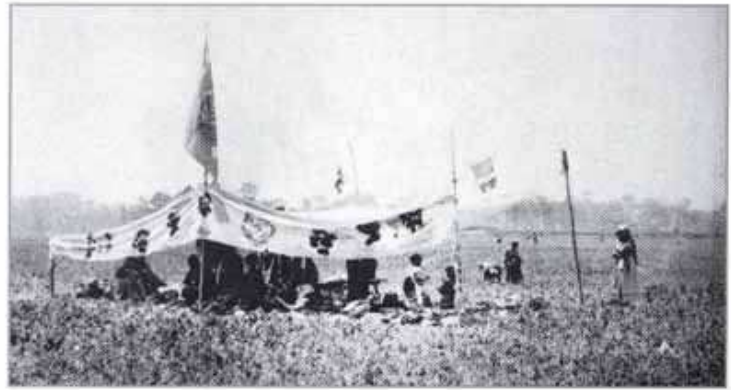
「戸田の原にてもまた桜草の基だ少なくなりしはみだりに採る者の増加せるゆえにして、植木屋などの採り去るほかに、一般遊覧人ごとに学校生徒の夥しく採るによるなり」
〔三好学「桜草原野の保存の必要」〕

「わずかに残った桜草を、まだやっと蕾を出したばかりのを土地の子供が取っていた。「取っていいの。」と行ってやったら、「今日はおまわりがこない日だ。桜草が欲しけりゃおれんちへアラー。売ってやろうか。」と言っていた」

(永溪早陽「最新実査 東京から」大正10年)

「江戸二近キ浮間ヶ原、戸田原等ノ荒川沿岸ノ原野ハ(略) 土地ノ変化、遊覧者ノ濫採、商売人ノ過度ノ採集等ノ為メニ今日ニテハ同地方ノ桜草ハ殆ンド採り尽サルルニ至レリ」

(三好学「史蹟名勝天然記念物調査報告第12号」「桜草ノ自生地ニ関スルモノ」大正9年)



写真① 浮間ヶ原でのサクラソウの花見の様子
(大正初期、東京都北区・梶原利夫氏所蔵絵ハガキより)

ここまで記せば、かつてサクラソウの自生地でのどのようなことが行われていたかは明白である。花が咲く時期になると、花見だ、遠足だ、運動会だと称して人々は大量そこに押しかけ、あたかもレンゲを摘むが如くサクラソウの花を摘んで家に持ち帰っていたのである。そしてその結果、サクラソウは次第に絶滅していったのである。先に引用した理学博士 三好学の「桜草原野の保存の必要」は続けて、このように記している。

「予はかつてある新聞に某学校にて桜草採集のため遠足を催すにつき、生徒各自根掘りの鍬への如きものを携うべき言い渡せる由を記せるを見たり。もし事実なりとせば、この如きは天然記念物の絶滅を奨励するものにして、不注意の至りというべし。」

この鍬は特殊なもので、深く張ったサクラソウの根を掘り出すために、特別に作られたものだったが、昔はサクラソウの売買を生業としていた家を始めとして、多くの家にあつたものだという(写真②)。

このように、サクラソウが摘む対象であったことが、荒川下流のサクラソウを絶滅させたことは十分に考えられる。しかし絶滅の原因は単にそれだけではなく、いろいろな要素が加わって、絶滅したと見るべきであろう。つまり、浮間ヶ原は河川改修による氾濫の減少による土



写真② サクラソウ掘りに使用された鍬
(東京都足立区・大久保幸治氏 所蔵)

地の乾燥化、舟渡地区（板橋区）は関東大震災後の家屋復興のための荒木田土の採取。さらには戦中・戦後の食糧増産のための開墾による土地の変化などというように。濫獲と個々の地域の土地の事情の相乗効果によって、荒川下流域のサクラソウは絶滅したとみたい。

それではなぜ、田島ケ原のサクラソウは生き延びたのであろうか。ここでまた、田山花袋の『東京近郊 一日の行楽』から一節を引用してみたい。

「戸田橋をわたって、その向こうにある戸田ケ原にも、やはり、沢山桜草がある。ここまでは都の人は滅多に出かけて行かないけれども（以下略）」

とある。結果としては、都の人々が大勢押しかけて、むしり取って、戸田のサクラソウも絶滅の道をたどるのであるが、距離の問題で、戸田にはあまり都の人が行かなかったというのである。戸田でそうならば、さらに上流の田島ケ原では尚更であったろう。東京から離れていたがためにあまり人目に付かず、人の往来が少なかったのが幸いしたのかも知れない。



「江戸名所花暦」に描かれたサクラソウの花見
(東京都荒川区・松崎啓三郎氏 撰)

そんな田島ケ原ではあったが、ここも次第に人に知られることとなる。三好学は「次第二世ニ知ラレ遊覧者多キヲ加ヘ、随テ桜草ノ採去ラルルモノ野シクナレリ。故ニ速ニ同原野ヲ天然紀念物トシテ指定」するよう求めている（前出「桜草ノ自生地ニ関スルモノ」）。これは、荒川下流域のサクラソウの絶滅という教訓に学んだ三好学の先手であった。そんなことが、今に田島ケ原が生き残った要因の一つとなっているのであろう。言い換えれば、田島ケ原の今は、荒川下流域のサクラソウの犠牲の上になりたっているのかも知れない。

(さいたま市立浦和博物館 学芸員 野尻 靖)

サクラソウあれこれ

サクラソウは遺伝的な変異の多い植物として知られています。本誌10号（平成12年3月20日発行）でも、「花形調査について」として花弁の形状や色の異なる花冠の写真を紹介しました。ここでは平成14年の開花期に田島ケ原で撮影した変り種の株を紹介します。



花冠が6弁のサクラソウ



花冠が4弁のサクラソウ